鹿児島県における「特徴のある肉用牛経営事例」

※本事例集に基づく，視察対応は一切お断りします。

鹿児島県肉用牛振興協議会

事例リスト

事例	市町村	経営類型	飼養規模	【自給飼料】 ・稲WCS ・放牧 ・未利用資源	【事業・資金活用】	【経営管理】 ・資金繰り重視 ・低コスト経営 ・段階的規模拡大	【特徴ある施設】 ・空き施設等利用 ・低コスト牛舎 ・共同利用	【新規就農等】 ・新規参入 ・新規就農 ・後継者確保	【省力管理】 ・哺乳ロボット ・分娩カメラ ・キャトルセンター	【生産性向上】 ・繁殖管理 ・子牛商品性向上 ・肥育技術	【衛生対策】 ・細霧装置 ・煙霧消毒 ・敷料確保	【情報交換】 ・情報収集 ・グループ活動	【複合経営】	【良質堆肥生産】
繁-1	瀬戸内町	繁殖	繁殖牛25頭	○	○						○			
繁-2	三島村	繁殖	繁殖牛28頭	○	○		○			○				
繁-3	志布志市	繁殖	繁殖牛28頭			○				○		○	○	
繁-4	十島村	繁殖	繁殖牛34頭	○	○		○							
繁-5	伊佐市	繁殖	繁殖牛35頭	○		○	○							
繁-6	日置市	繁殖	繁殖牛40頭	○	○									
繁-7	湧水町	繁殖	繁殖牛40頭	○	○	○	○	○		○				
繁-8	薩摩川内市	繁殖	繁殖牛47頭		○			○						
繁-9	鹿屋市	繁殖	繁殖牛50頭		○		○	○		○				
繁-10	霧島市	繁殖	繁殖牛60頭	○	○					○		○		
繁-11	和泊町	繁殖	繁殖牛63頭	○							○			○
繁-12	知名町	繁殖	繁殖牛70頭	○		○	○			○				
繁-13	霧島市	繁殖	繁殖牛80頭	○	○	○	○			○				
繁-14	曽於市	繁殖	繁殖牛80頭	○		○			○					
繁-15	中種子町	繁殖	繁殖牛85頭	○	○				○					
繁-16	鹿屋市	繁殖	繁殖牛90頭		○	○		○	○		○			
繁-17	西之表市	繁殖	繁殖牛95頭	○				○					○	
繁-18	さつま町	繁殖	繁殖牛100頭		○	○	○		○			○		
繁-19	南種子町	繁殖	繁殖牛100頭	○	○			○				○		
繁-20	伊佐市	繁殖	繁殖牛110頭	○	○		○		○					

事例	市町村	経営類型	飼養規模	【自給飼料】 ・稲WCS ・放牧 ・未利用資源	【事業・資金活用】	【経営管理】 ・資金繰り重視 ・低コスト経営 ・段階的規模拡大	【特徴ある施設】 ・空き施設等利用 ・低コスト牛舎 ・共同利用	【新規就農等】 ・新規参入 ・新規就農 ・後継者確保	【省力管理】 ・哺乳ロボット ・分娩カメラ ・キャトルセンター	【生産性向上】 ・繁殖管理 ・子牛商品性向上 ・肥育技術	【衛生対策】 ・細霧装置 ・煙霧消毒 ・敷料確保	【情報交換】 ・情報収集 ・グループ活動	【複合経営】	【良質堆肥生産】
繁-21	西之表市	繁殖	繁殖牛116頭	○	○	○	○	○						
繁-22	中種子町	繁殖	繁殖牛120頭	○	○	○		○						
繁-23	肝付町	繁殖	繁殖牛150頭			○			○		○			
繁-24	鹿屋市	繁殖	肥育牛165頭	○	○				○		○			
繁-25	錦江町	繁殖	繁殖牛170頭		○	○			○		○			
繁-26	霧島市	繁殖	繁殖牛200頭	○	○		○	○	○					
繁-27	大崎町	繁殖	繁殖牛220頭		○	○		○	○					
繁-28	曽於市	繁殖	繁殖牛250頭		○	○			○		○			
繁-29	喜界町	繁殖	繁殖牛270頭				○	○	○					
繁-30	徳之島町	繁殖	繁殖牛300頭		○	○			○	○				
肥-1	鹿屋市	肥育	肥育牛110頭					○			○		○	○
肥-2	曽於市	肥育	肥育牛370頭			○	○			○	○		○	
一貫-1	南九州市	一貫	繁殖牛52頭 肥育牛70頭				○							
一貫-2	南九州市	一貫	繁殖牛50頭 肥育牛80頭				○							
一貫-3	南九州市	一貫	繁殖牛65頭 肥育牛120頭	○			○							
一貫-4	いちき串木野市	一貫	繁殖牛70頭 肥育牛180頭	○	○		○							
一貫-5	出水市	一貫	繁殖牛120頭 肥育牛160頭	○										
一貫-6	鹿児島市	一貫	繁殖牛130頭 肥育牛500頭	○	○					○				○
一貫-7	長島町	一貫	繁殖牛200頭 肥育牛350頭	○					○					
一貫-8	薩摩川内市	一貫	繁殖牛170頭 肥育牛1,000頭	○	○			○				○		

繁－1

【キーワード】
放牧，事業活用，衛生対策

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，妻

3　飼養頭数
繁殖雌牛25頭

4　飼料作物
永年草：ローズグラス　2ha
冬　作：エン麦　1ha
放牧地：　2ha

5　経営の特徴
・Uターンし，与路島で放牧を取り入れた経営を行っている。
・人工授精師免許を取得し，島内の授精業務の一部を担っている。
・高齢化の進む島内に於いてリーダー的な存在であり，高齢農家の収穫作業等の補助を行うなど地域との連携を大切にしている。

6　今後の目標
・10年後に繁殖雌牛を50頭まで拡大し，経営の確立を目指す。
・大型機械の導入により，収穫作業等の効率化を図る。

【経営発展の経過】

S61年～	高校卒業→専門学校卒業(H2年)
H2年	企業入社
H7年	自営業を始める
H21年	瀬戸内町にUターンし，町の営農支援センターに入所
H22年	営農支援センター修了
	与路島で両親から経営の一部を引き継ぎ就農
H23年～	就農支援資金，リース事業等を活用しながら増頭を進める
H24年	家畜人工授精師免許取得
H25年	畜産基盤再編総合整備事業の活用について検討開始
H26年～	畜産基盤再編総合整備事業で規模拡大を計画中

【経営発展の過程で苦労した点】

・飼料畑が確保しづらい。

・小型の作業機しか所有していないため作業効率が悪い。

・離島であることから生産関連資材が割高になり経費が上がる。

・イノシシによる飼料作物への被害が発生している。

Uターンして畜産経営を開始

畜舎周辺全景。限られた耕地面積で経営を行っている。

林間等を活用した放牧の実施

島内の山間部で放牧を行う。

積極的な畜舎環境改善への取り組み

高圧洗浄機と石灰塗布による畜舎消毒

規模拡大に向けての経営管理

パソコンによる複式簿記記帳

繁－２

【キーワード】
共同利用施設，事業活用，放牧，生産率向上

【経営概況】

1　経営形態

肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)

本人，妻

3　飼養頭数

繁殖雌牛28頭

4　飼料作物

冬　作：イタリアン　30a

放牧場：20ha

5　経営の特徴

・放牧地を有効活用し、母牛管理の省力化を図っている。また、放牧種雄牛（以下「まき牛」）を利用した自然交配と人工授精による生産率の向上に努めている。

・青色申告を実施し、自らの肉用牛経営の把握に努めている。

・夫婦で協力して作業分担し、発情発見を確実に行うことで、年１産させるよう努めている。

・計画的に淘汰更新を行うことにより、優良繁殖雌牛の導入に努め、地域の肉用牛改良に進んで貢献している。

6　今後の目標

・島でゆとりある繁殖雌牛30頭規模経営を確立するため，飼養管理，自給飼料確保の効率化を図る。また、島の若手農家へ理想的な畜産経営のあり方を継承していく。

【経営発展の経過】

H4年	帰郷し、民宿経営を始める
H5年	父から母牛2頭を継承し、就農
	草地開発整備事業により農業用機械を導入
H6年	畜産基盤再編総合整備事業により、共同利用畜舎1棟を整備
	青色申告を開始する
H9年	畜産基盤再編総合整備事業により、飼料倉庫1棟を整備
H10年	繁殖雌牛貸付事業を利用し、繁殖雌牛10頭に規模拡大
H11年～	草地開発整備事業により草地改良を行う
H15年	繁殖雌牛貸付事業を利用し、繁殖雌牛25頭に規模拡大
H18年	特定離島ふるさとおこし推進事業により農業用機械を導入
H22年	特定離島ふるさとおこし推進事業により共同利用繁殖牛舎1棟を整備
H26年	現在、繁殖雌牛28頭を飼養している

【経営発展の過程で苦労した点】

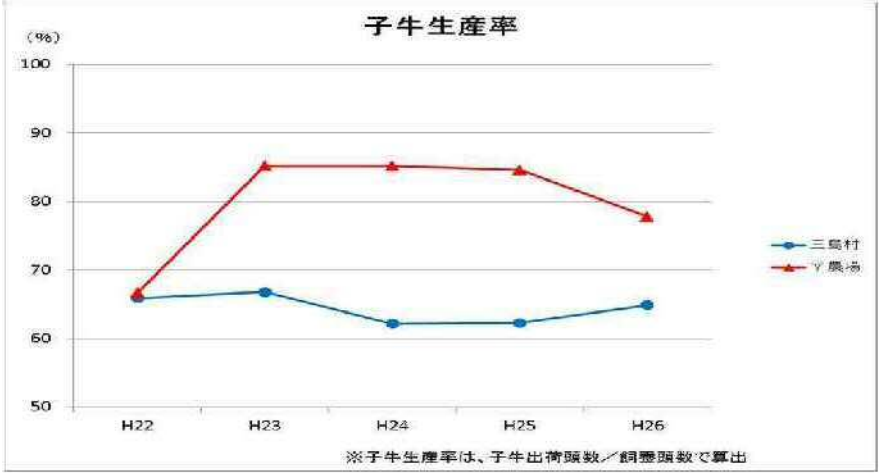
・放牧場が整備される前は、放牧場の起伏が激しく、繁殖雌牛の見回りが大変だった。 整備されてからは、放牧場の見回りを毎日欠かさず行い、発情発見の向上に努めている。

・無登記牛を処分し、登記牛の積極的な導入を行ったが、子牛の生産率を向上させることが大変だった。

・自分の経営をしっかり把握し、事業計画を明確化することで、事業を有効活用できた。そのため、資金面での苦労はなく、順調に規模拡大ができた。

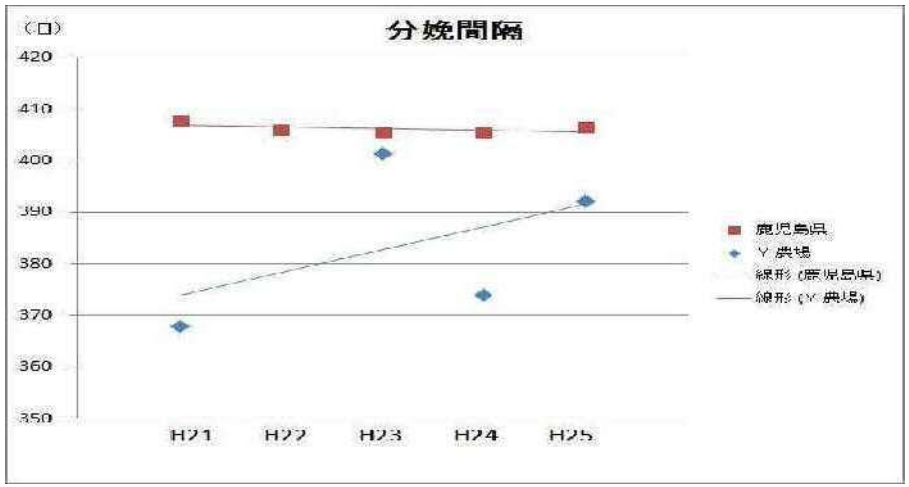
【Y農場と三島村の子牛生産率の比較】

毎日の発情発見を夫婦でしっかり行い、人工授精させることと、授精回数が多回数の牛は自然交配を行うことで着実に子牛生産率の向上につなげることができた。平成22年は、村平均とほぼ同じ約65％だったが、現在は、約75％～85％まで向上した。



【分娩間隔の比較】

子牛は、おおよそ生後2ヶ月で離乳し、母牛に60日以内に人工授精を行うことで、分娩間隔の短縮につながるよう心掛けている。



【まき牛の管理】

毎日、朝夕まき牛の管理を行う。牛の状況や乗駕等確認をする。

【放牧場で管理する様子】

妊娠鑑定を行い、維持期、分娩後、分娩前と牧区分けを行い、繁殖ステージ毎の管理を行っている。畜舎で分娩させることで、事故の低減につながっている。

繁－３

【キーワード】
複合経営，女性グループ，情報交換
資金繰り重視，子牛商品性向上

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛繁殖＋園芸　の複合経営

2　構成(労働力)
本人，娘3人，夫

3　経営規模
繁殖雌牛28頭（育成牛4頭含む）　＋　キャベツ2.5ha

4　飼料作物
春夏作　4.9ha（トウモロコシ2.3ha，エン麦1.3ha，
イタリアンライグラス1.3ha）
秋冬作　2.6ha（イタリアン・エン麦混播2.3ha，
イタリアンライグラス0.3ha）

5　経営の特徴

・女性が経営の中心であり，肉用牛と園芸の複合経営のほかに農外収入もあり，経営に安定感がある。

・肉用牛女性グループで毎月検討会や情報交換会を行い，常に新しい技術や情報を集め，経営に活かしている。

・簿記記帳等を自ら行うことで経営を把握し，自己資金の回転を重要視した経営を目指している。

6　今後の目標

・次女夫婦との2経営体で，繁殖雌牛60頭を目指しつつ，飼養管理，自給飼料確保の効率化を図る。

【経営発展の経過】

S56年	結婚を機に就農（当時は生産牛2頭で，園芸中心）
H2年	新しい牛舎を建てる（生産牛10頭）
H13年	生産牛預託開始
H16年	肉用牛女性グループを結成し，活動開始
H19年	女性農業経営士に認定
	長女が後継者として就農
H20年	三女が後継者として就農
H23年	生産牛預託終了，牛舎を修繕し自己資金で生産牛増頭
H25年	次女が別経営として新規就農

【経営発展の過程で苦労した点】

・肉用牛繁殖と園芸の複合経営を行う一方で，夫の農外収入や生産牛預託等経営が安定するまでの所得確保に努めてきたことが，相場に左右されにくい経営につながった。

・肉用牛女性グループ等仲間作りによる情報収集に努め，自分達で行う勉強会に多様な講師を呼び，学ぶことで，技術面・経営面を確立してきた。

・子牛商品性の向上のため，肉用牛女性グループで子牛育成マニュアルに基づく体測検討会を行い，粗飼料多給による子牛育成方法を学んだ。

妊娠鑑定が済んだ繁殖雌牛を出しているパドック。
コの字型牛舎の外にあたり，スタンチョンをつけて管理もしやすくしている。

昔のコの字型牛舎から張り出して増設した牛舎。
屋根付きで使い勝手はよい。

牛舎は自己資金で手作りの部分も多く
飼槽には外へこぼさないように
板をつけ工夫している。

トウモロコシのスタックサイロ。
イタリアンロールが中心の当地域では珍しく
年間を通じて使用している。

経営のもう1つの柱，キャベツ。

繁－4

【キーワード】
事業活用，共同利用施設，放牧

【経営概況】

1　経営形態

肉用牛　　繁殖経営

2　構成(労働力)

本人，研修生　1名

3　飼養頭数

繁殖雌牛　34頭

4　飼料作物

夏　作：ローズグラス　2ha×5回刈り

※飼料作物については、夏場に牧草を貯蔵し、冬場の牧草（牧場）が不足するときに給餌する。

5　経営の特徴

・繁殖雌牛に関しては、広大な牧場を所有していることもあり、周年放牧による飼養管理に努めている。
・子牛については、人工哺乳技術を利用しており、子牛育成マニュアルに沿った飼養管理に努めている。また、子牛の腹作りを大切にしている。
・研修の受入れをしており、新規就農者（I･Uターン者）の育成、定着に努めている。
・牛舎の衛生管理を徹底しており、牛に快適な環境を作るように努めている。

6　今後の目標

・繁殖雌牛50頭経営を目指しているため、飼養管理、自給飼料確保の効率化を図る。

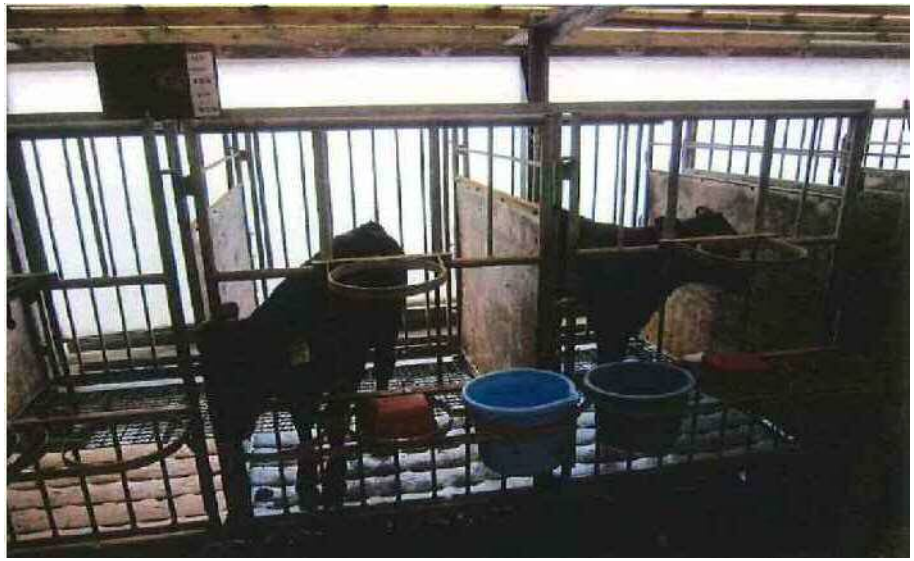
【経営発展の経過】

S57年　鹿児島県立農業大学校卒業
S58年　畜産経営開始（就農）※両親と共に畜産業を営む
S62年　十島村役場入庁～H19年2月退職　※経済課で畜産業を担当する。
H19年　畜産経営開始（就農）※両親から経営を譲り受ける。
　　人工授精業務開始
H20年　家畜導入事業（県有貸付、特別導入）により、7頭の子牛を導入する。
H21年　家畜導入事業（県有貸付、特別導入）により、6頭の子牛を導入する。
H22年　村の生産施設整備事業により、飼料の集草機械を整備する。
H23年　村の生産施設整備事業により、子牛哺育施設（270㎡）を整備する
H24年　特定離島（畜産振興施設整備）事業により、共同利用牛舎（199.95㎡）を整備。
　　※宝島畜産組合で共同利用。
　　村の生産施設整備事業により、堆肥舎を整備する。
　　研修生の受入れを開始する。（※I･Uターン者を受入れる。）
H25年　村の生産施設整備事業により、飼料給餌機械を整備。
H26年　村の生産施設整備事業により、ホイルローダ（1台）を整備。
　　遊休農地の開墾により、飼料畑を整備する。

【経営発展の過程で苦労した点】

・就農当初は、無登記の牛が多くおり、子牛セリにおいても低価格の取引が続き、売り上げが伸びなかった。
・共同利用施設（牛舎、機械）の利用により、償却資産に掛かる先行投資を抑えるように努めた。
・子牛の出荷については、長時間の船輸送であるため、出荷における子牛のストレス軽減に努めた。
・子牛、繁殖雌牛が病気、事故を起こした時に、船便が少ないため、早期的な治療ができない。（※ある程度の薬品は保持しているが、突発的な病気、事故に対しては薬品の送付が遅れることから、病気、事故が悪化する。）
・冬場の牧草（牧場）が不足するため、自給飼料の確保に努めた。
・H21、H22年度に子牛を導入（計：13頭）し、増頭を図ったときの飼養管理、運営が大変だった。

放牧地を活用した低コスト管理



各種事業を活用した共同利用施設での管理及び人工ほ育による子牛の商品性づくり

繁－５

【キーワード】
低コスト牛舎，粗飼料自給率100%
段階的規模拡大（自家保留），経営転換

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，妻　2名

3　飼養頭数
繁殖雌牛　35頭

4　飼料作物
夏　作：　4ha
冬　作：　14ha（イタリアン）

5　経営の特徴
・自給粗飼料に加え，堆肥交換による稲ワラ収集により，母牛用の粗飼料自給率100%の低コスト経営
・自力施工による畜舎の増設で整備費を節減し，規模拡大を図った。
・経営の合理化により，増頭を図った。（「たばこ」を中止，「水稲」と「肉用牛繁殖」）から2部門経営

6　今後の目標
・繁殖牛40頭規模への拡大

【経営発展の経過】

S53年	就農（繁殖雌牛3頭，たばこ，水稲）
H7年	畜舎整備（スタンチョン設置，20頭規模へ拡大）
H20年	畜舎整備（倉庫の補改修，育成牛舎，子牛牛舎，分娩牛舎）
H22年	「たばこ」を中止 →繁殖雌牛の規模拡大 →繁殖牛舎を増設（スタンチョン8頭分を整備） →分娩牛舎の増設
H25年	子牛育成牛舎を増設

【経営発展の過程で苦労した点】

・たばこの収穫時期における労働力不足を考慮し，肉用牛繁殖経営への転換による規模拡大を行うことで，経営の合理化が図られた。

・自力施工による畜舎整備を行うことで，定期的な増設による設備投資を圧縮するとともに，管理作業等を考慮した利便性の高い施設整備が可能となった。

・自家保留を中心とした増頭，更新を行うことで，経営の健全化と繁殖成績の向上が図られた。（H22年以降は，5頭/年のペースで自家保留）

繁殖牛舎（右側：増設した分娩舎）

分娩牛舎（飼槽を改造，分娩監視装置の活用）

左：機械庫，右：分娩室→育成牛舎

哺育・育成牛舎（柵の金具に「たばこ施設」を再利用）

飼料庫に育成牛舎を増設

飼料庫（稲わらを確保）

繁－６

【キーワード】
事業活用，放牧，子牛育成，
粗飼料自給率100%

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
夫婦，後継者夫婦

3　飼養頭数
繁殖雌牛40頭

4　飼料作物
夏作：スーダングラス，野草6ha
冬作：イタリアン，エンバク6ha

5　経営の特徴
・放牧と舎飼いを組み合わせた飼養管理
・のびのびすっきり子牛育成マニュアル（県推奨の子牛育成飼料給与マニュアルの鹿児島中央版）に取り組むなど商品性向上に努めている。
・親夫婦と後継者夫婦の４人で家族経営協定を締結。役割分担を明確にした家族経営を営む。

6　今後の目標
・繁殖雌牛を80頭まで増頭
・放牧を活用し，自給飼料に立脚した肉用牛経営のスタイルを維持

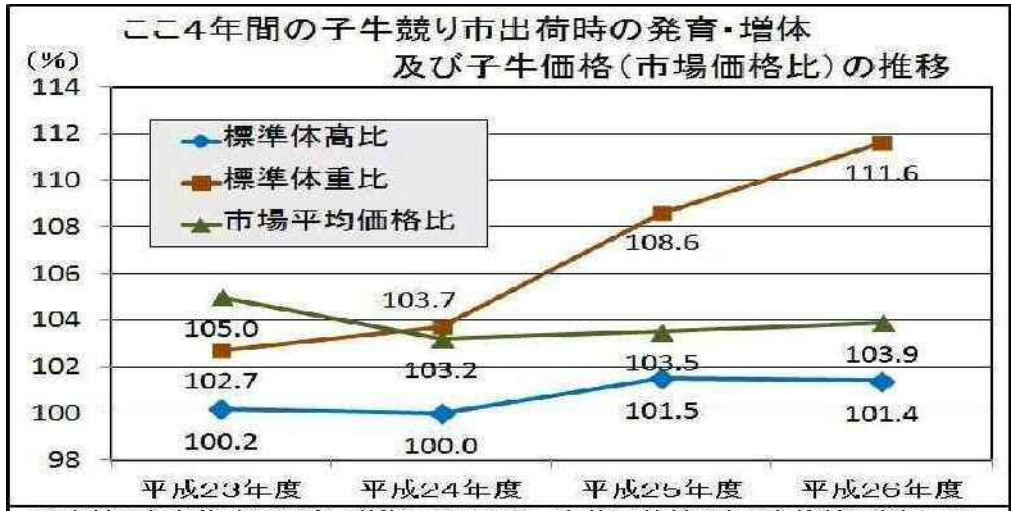
【経営発展の経過】

S47年	高等営農研修所卒業 即就農し，繁殖雌牛26頭規模の経営を開始
S52年	農業改良資金により牛舎を整備
S57年	補助事業により共同利用牛舎を整備
H15年	畜産基盤再編総合整備事業で草地整備や農機具導入を実施
H17年	後継者が，農業大学校卒業後就農
H19年	親子３人で家族経営協定を締結
H24年	家族経営協定を再締結
H25年	防災営農対策事業で飼料作物用の共同利用機械を整備

【経営発展の過程で苦労した点】

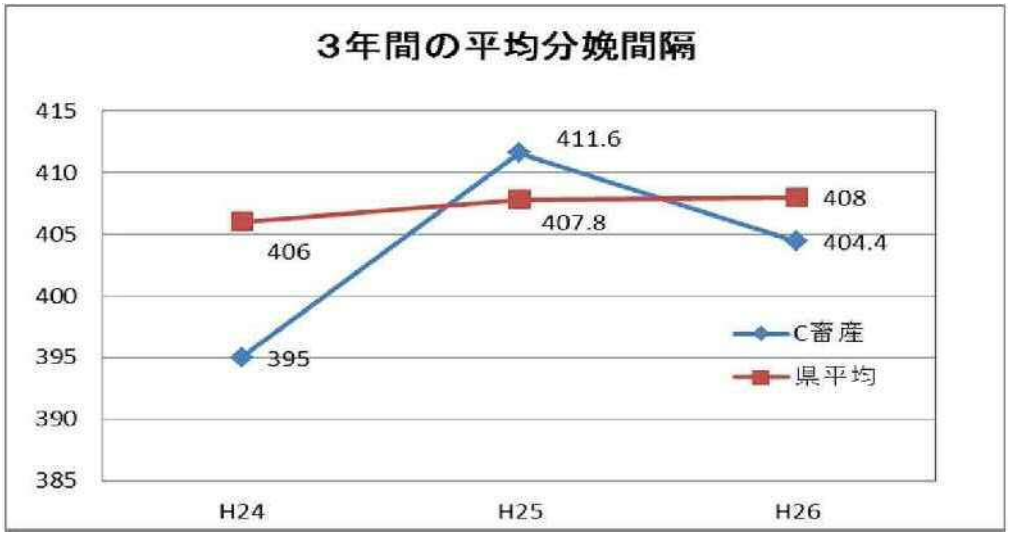
・就農前に農場の牧野改良を行い，就農準備を行った。
・就農後は子牛価格低迷等もあり，思うような拡大はできなかった。
・農業近代化資金，市町の牛貸付制度，自家保留により緩やかな増頭による規模拡大を図った。
・H15年の草地整備により放牧や自給飼料確保が安定し，経営上大きなプラスとなった。

放牧地



子牛競り市出荷時の発育・増体については，出荷日齢が異なると比較できないので，和牛登録協会の示す子牛発育標準・子牛体重標準に対する比で比較した。
同様に，子牛価格も出荷年月により変動するので，出荷当該年月子牛競り市平均価格との比として集計した。

放牧状況



※分娩間隔は県平均並みであるが、放牧により放牧期間中の飼料代、飼養管理に係る労力の軽減を図ることができ経営上メリットが大きい。

繁－7

【キーワード】
新規就農，事業活用，粗飼料自給率100%
資金繰り重視（削蹄），低コスト牛舎
子牛商品性向上

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，両親　3名

3　飼養頭数
繁殖雌牛40頭

4　飼料作物
夏　作：WCS　2ha
冬　作：イタリアン　12ha

5　経営の特徴
・繁殖牛のステージ別管理による年1産の実現。
・ゲージとパドックを用いた，人工哺育のステージ別管理。
・自家産稲わら5haに加え，堆肥との交換による稲わら収集5haで粗飼料自給率100%の低コスト経営。
・育成マニュアルに基づく飼養管理技術の実践により，出荷月齢を早期化。
・間伐材等を利用した，畜舎，堆肥舎等の自力施工による整備コストの抑制。
・本人は削蹄師として，父親は人工授精師として活動。

6　今後の目標
・繁殖雌牛60頭への規模拡大。

【経営発展の経過】

H19年3月	農業大学校畜産学部肉用牛科卒業。
H19年4月	削蹄技術の習得を目的に，近隣の農場で研修を開始。 →同時に繁殖，育成技術の習得 →父親の経営(繁殖牛12頭)を補佐 （主に哺育育成と自給飼料生産部門を管理）
H21年	家族経営協定を締結。
H21年	青年農業士取得。
H22年3月	新規参入円滑化対策事業を活用し，畜舎整備と繁殖雌牛30頭を導入。
H22年7月～	湧水町内で削蹄業務を開始
H23年	子牛育成マニュアル管理指導を実践
H24年～	削蹄作業に併せて，育成マニュアル技術の普及にも尽力

【経営発展の過程で苦労した点】

・経営開始直後に削蹄業務を開始したことで，子牛販売収入が無い1年程度の期間においてもスムーズな運営を行うことができた。

・当初，制限哺育に取り組んだものの，事業導入牛の半数を占める初産牛の泌乳量に起因すると思われる子牛発育のバラツキが発生し，人工哺育技術の導入で改善した。

・研修期間中から県の育成マニュアルに基づき，飼料を計量して給与してきたことから，関係機関による管理指導に取り組むことで，さらにスムーズな哺育育成を実践することができた。

・町内の削蹄業務を行う中で得た有効な情報を取り入れるとともに，自らも発信することで地域の技術向上に貢献していきたい。

繁殖牛：ステージ別管理

柵のメモリで発育チェック

繁殖牛へWCS給与

哺育初期はゲージ，後半はパドックで群管理

間伐材等を利用した施設整備：堆肥舎兼農具庫，のこくず庫

繁－8

【キーワード】
新規参入，事業・資金活用

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，妻，父　　計2.0名

3　飼養頭数
繁殖雌牛　　47 頭

4　飼料作物
夏　作：スーダングラス，飼料用稲等　2.2ha
冬　作：イタリアン　2.2ha

5　経営の特徴

・新規参入であるが，技術研修を就農前から実施したことにより，生産率，販売価格等が実績が高い。

・パソコンによる複式簿記記帳を行い，数値実績に基づく経営検討を行うことにより，的確な経営改善がなされている。

6　今後の目標

・地域との連携を密接に行うことで，飼料用稲の確保による低コスト経営を目指している。

【経営発展の経過】

H19年	畜産試験場で肉用牛技術を学ぶ。研修期間に事業計画の策定及び牛舎整備等経営開始の準備を実施。
H20年	畜産基盤再編総合整備事業により，60頭規模牛舎を整備。
H21年～	自己資金及び制度資金等活用により，60頭規模を目標に経営開始 人工哺育技術導入により，生産率向上を実現 複式簿記記帳を開始し，定期的に経営実績に基づく低コスト化を検討
H25年～	関係機関の指導の下で，子牛発育調査に基づく飼養管理技術の確認及び改善を実施し，技術向上を図っている。

【経営発展の過程で苦労した点】

・繁殖雌牛の飼養経験がなかったため，１年間の研修を行った。

・先行投資が多額であり，補助事業及び制度資金等の活用が必要であった。そこで，就農前の事業計画の策定に多くの時間を要した。

（就農前に策定した緻密な経営計画が，明確な経営目標となり，スムーズに技術及び経営の改善等を行うことができた。）

母牛舎(放飼，スタンチョン)

子牛舎(換気，保温ができる全面カーテン)

堆肥舎

高床式の哺育ゲージ(衛生的な牛床を確保)

繁－９

【キーワード】
新規就農，事業・資金活用
子牛商品性向上，機械共同利用

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成（労働力）
本人

3　飼養頭数
繁殖雌牛　50頭

4　飼料作物
夏作：ソルゴー，トウモロコシ　3ha
冬作：イタリアン　3ha

5　経営の特徴
・定期的な観察
・子牛育成マニュアルを遵守した衛生管理
・年1産を目指した飼養管理の徹底
・兄との機械の共同利用による機械投資低減

6　今後の目標
・現状の繁殖雌牛50頭規模を維持しながら疾病予防を徹底し，子牛商品性の向上に努める

【経営発展の経過】

H16年　兄が新規就農し，父親の繁殖雌牛60頭規模の経営を継承

H17年　農業大学校卒業
兄の経営を手伝いながら，人工授精等の技術を磨く

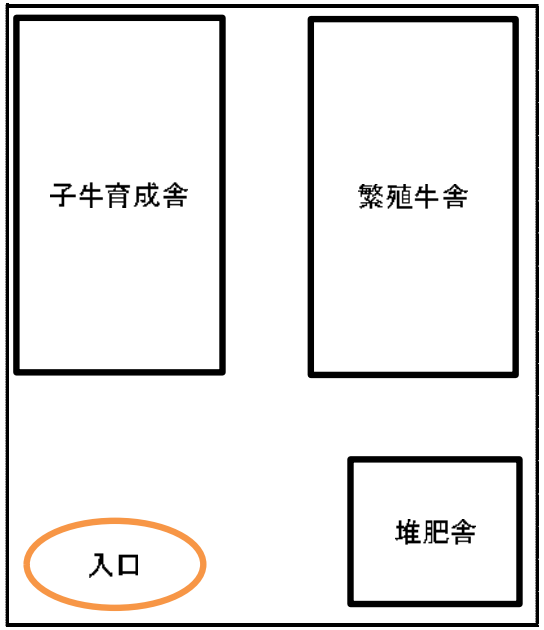
H21年　新規参入円滑化事業を活用し，繁殖雌牛50頭規模で新規就農
（繁殖牛舎1棟，育成舎1棟，堆肥舎1棟，繁殖牛50 頭）
就農施設等資金及び就農定着化促進事業を活用
（飼料作物収穫調製等機械を導入）
フォレージハーベスタ，K型ローラー，バーチカルハロー，ボトムプラウ，ジャイロテッダー

【経営発展の過程で苦労した点】

・就農した翌年に宮崎で口蹄疫が発生したため，防疫作業に苦労した。

子牛育成牛舎

○口蹄疫発生後は防疫作業の徹底に努めている。



○新規参入円滑化事業を活用し，繁殖雌牛50頭規模経営を開始

○就農施設等資金（現「青年等就農資金」を活用し機械導入

繁－10

【キーワード】
事業活用，子牛商品性向上，情報交換
粗飼料自給率100%

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，妻　2名

3　飼養頭数
繁殖雌牛60頭

4　飼料作物
夏　作：ソルゴー5.0ha，ヒエ7.0ha
冬　作：イタリアン10.0ha，ライムギ3.0ha

5　経営の特徴
・テールペイント等を活用した発情確認により，1年1産を実現。
・カーフゲージを使用した人工哺育と，子牛専用TMRの利用による哺育・育成管理の省力化。
・自給粗飼料に加え，自衛隊演習地・肝属川河川敷等の野草利用を活用した粗飼料自給率100%の低コスト経営。
・細霧装置を用いた暑熱対策，噴霧消毒による衛生面の充実。
・部門別作業分担と，セリ市終了時の検討会の実施による管理体制の強化。パソコン簿記記帳による経営把握。

6　今後の目標
・繁殖雌牛100頭への規模拡大。(次男との共同経営)

【経営発展の経過】

S63年	畜産講習所卒業。
S63年	統計情報事務所就職。
H16年	統計情報センター退職。
H16年	就農。両親の元で研修開始。
H17～19年	子牛発育調査を実施。
H18年	新規参入円滑化対策事業を活用し，畜舎整備と繁殖雌牛を導入。 →開始時：繁殖雌牛50頭（JA預託25頭） →粗飼料(ロールベール)生産を外部に委託し，初期投資を抑制
H19年	家族経営協定締結。
H23年	畜産近代化リース事業を活用し飼料調製用機械を導入。
H25年	長男が農業大学校に進学

【経営発展の過程で苦労した点】

・子牛の疾病等を考慮して，制限哺育や人工哺育等に取り組んだが，技術習得に苦労した。
・関係機関による子牛発育調査指導に取り組むことで，飼養管理技術の向上が図られた。
・自給粗飼料の生産において，天候等には左右されるとともに，圃場が散在しており作業効率が悪い。
・若手部会の発足に取り組むなど，情報収集や意見交換を行うことで，飼養管理や飼料生産はもとより経営面での改善に努めた。
・母牛の更新，高齢牛の効率的な利用，若齢不妊牛対策として，受精卵移植技術を積極的に取り入れている。

繁殖牛舎，ラップサイレージ給与

分娩牛舎

子牛育成牛舎

哺育ゲージ

防寒対策

防疫対策（施設入口に設置）

繁－11

【キーワード】
敷料確保，耕畜連携，良質堆肥生産
畑かん利用，粗飼料自給率向上

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成（労働力）
本人、後継者　　計　2名

3　飼養頭数
繁殖雌牛63頭

4　飼料作物
夏　作：ローズグラス　310a，　ソルゴー　355a(期間借地主体)
冬　作：イタリアンライグラス　65a

5　経営の特徴
・敷料確保が難しい離島のハンディを抱えながら、積極的にサトウキビハカマの収集活用やバカスの利用等により飼養環境改善に取り組んでいる。
・良質堆肥作りに熱心に取組み,腐植の少ない赤土の土壌改良と土づくりによる,飼料作物増収に努めている。
・耕種農業も盛んなため,年間借地が難しい中，ばれいしょ後等の期間借地への飼料作物栽培により，飼料自給率向上を図っている。
また，良質堆肥の投入やプラソイラによる深耕を行ってから借りていた農地を返すなど、耕畜連携の積極的な取組を進めている。
・期間借地ほ場では，ソルゴーの2回刈りでフレールハーベスタ（長く切断できるよう刃を工夫）で刈取，ロールベール・ラップする体系を独自に工夫。
・畑かんの水を積極的に活用し飼料生産安定と増産を図っている。
水利用推進の役割を担い、畑かん推進など地域貢献にも取り組んでいる。
・AI業務でも，繁殖成績を各農家に情報提供し受胎率向上に貢献している。

6　今後の目標
・粗飼料自給率100%を目標に良質粗飼料の増産に努め、家族の役割分担と協力体制に基づく飼養管理技術向上等により，経営の発展を目指す。

【経営発展の経過】

S54年	畜産の専門指導機関での実技習得と学習を終了 （家畜人工授精所で人工授精や家畜飼養管理の実践経験を積む） 人工授精を始めながら、肉用牛(8頭)＋サトウキビ経営を開始
H14年	補助事業を活用しながら飼料作のロールベール体系導入
H16年	制度資金利用により60頭規模牛舎+堆肥舎建設
H24年	60頭規模に至る
H26年	後継者就農（県研究機関や先進農家で研修後就農）

【経営発展の過程で苦労した点】

・地域的に飼料畑確保が難しい中、夏期に利用されていない耕種農家の畑に目をつけ、堆肥投入や深耕サービスとの交換で飼料畑を確保してきた。
・ローズグラスの永年栽培では、高い生産性を維持するためには、雑草との戦いであったため，スポット除草などをこまめに行い，雑草の早期防除に努力した。
・平成13年までは,飼料作作業機械を持たず苦労したが,地域の共同利用機械利用で助かった。
・既存の機械を活用したソルゴーのロールベールラップサイレージ体系確立に苦労した。
・敷料確保が難しく苦労した。現在の,サイドレーキを活用したさとうきびハカマ収集方法を試行錯誤の末，実施可能な作業体系とした。
・分娩事故等が懸念されたため、分娩監視カメラの導入を進めるなど増頭に備えた。
・経営拡大に当たっては、制度資金を活用し対応したが、増頭や運転資金の確保には苦労した。

（耕畜連携による飼料作物栽培）

期間借地ほ場別　飼料作物栽培利用体系図（Y 農家事例）

前作作目（ｻﾄｳｷﾋﾞ）　（ほ場借上期間）　飼料作栽培期間（開始日　終了日）　播種　堆肥散布　散水　収穫　返却前ﾌﾟﾗｽﾁｯｸ　後作予定（ﾊﾞﾚｲｼｮ）

前作作目	当期栽培飼料作物	ほ場仮NO	農地所有者	ほ場面積a	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	旧地期間
					上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	上旬 中旬 下旬	
サトウキビ	ソルゴー	8	A	30	ｻﾄｳｷﾋﾞ	2/14	3/9			6/12	7/30	8/3	ｻﾄｳｷﾋﾞ				166
	ソルゴー	11-1	C	50	ｻﾄｳｷﾋﾞ	2/17	3/6			6/12	7/25	8/2	グラジオラス・バレイショ等				166
	ソルゴー	13	E	25	ｻﾄｳｷﾋﾞ			4/12 4/22	5/1		7/21		9/25	バレイショ			166
バレイショ	ソルゴー	1	G	30	ﾊﾞﾚｲｼｮ		3/28	4/15			7/6		9/8 9/14	バレイショ			164
指標数値	借地合計面積　350a				借地ほ場数　11	借地1筆平均面積　31a	借地前作ｻﾄｳｷﾋﾞほ場合計面積　205a（借地の内59%）,前作ﾊﾞﾚｲｼｮほ場合計面積　145a（借地の内4						期間借地への栽培飼料作目:ｿﾙｺﾞｰ89%,ﾛｰｽﾞｸﾞﾗｽ11%			平均借地期間　148日	

<参考> 自作地 飼料作物 ﾛｰｽﾞｸﾞﾗｽ永年利用 （平均4年更新）	350 a	例1 例2 例3
飼料作物栽培合計面積　a	700	

畑かんの定置式散水施設を圃場に設置し，フル活用で飼料作物の安定生産

期間借地にも自家産良質堆肥を投入し，自給粗飼料を増産確保
（改良版　ﾌﾚｰﾙﾊｰﾍﾞｽﾀで30～40cmに切断したソルゴーのﾛｰﾙﾍﾞｰﾙ作業の様子）

繁－12

【キーワード】
粗飼料自給率100%，低コスト牛舎
農業機械長期利用，繁殖管理板，経営管理

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
２人

3　飼養頭数
繁殖雌牛70頭

4　飼料作物
夏　作:ローズグラス　7.1ha
秋冬作:トウモロコシ　2ha

5　経営の特徴
・南西諸島のメリットを活かすため，台風シーズン終わりの10月上旬にトウモロコシを播種し5月頃までに刈り取る体系を確立。
・ローズグラスは，4年目更新（毎年1/4）を実践し，更新は，10月上旬に行う（更新は10月に行い，トウモロコシ収穫後の4～6月に播種）。
・農業機械整備を入念に行い，耐用年数の延長に努めている。
・ほ場を集積し，作業の効率化を実現。
・繁殖管理板，パソコンによる経営簿記，農作業日誌により経営把握と作業効率化を図っている。

6　今後の目標
・繁殖雌牛70頭経営の安定化を図るため，飼養管理技術の向上と，これまで通り自給飼料100%確保と良質粗飼料確保を図る。

【経営発展の経過】

S57年～	農外に就業していたが、Uターン 牛1頭＋さとうきび）の後継者として就農 手作りの牛舎で増設しながら，10数頭まで自力で増頭。その間 道路端の雑草の毎日刈取りやキビトップ等で粗飼料を確保
H5年	自力施行で牛舎建設開始。地ならし，基礎建設。
H6年	公庫資金を利用し50頭規模牛舎を2年かけ建設，30頭規模へ
H7～22年	自家保留・町有牛等も利用し，計画的増頭65頭へ
H23～24年	繁殖牛更新事業等を利用し，20頭程度更新
H25年	繁殖牛70頭規模へ，経営移譲準備
H26年	経営移譲（後継者世代へ主体が移行）

【経営発展の過程で苦労した点】

・　農外からの就農後、肉用牛1頭からの増頭で，30頭規模の牛舎を建てるまでは、道路端の雑草刈取り利用割合が高かったため，粗飼料確保には苦労の連続であった。

・牛舎建設に踏み切ったH5～6年に子牛価格下落が激しく、資金繰りに苦労した。牛舎建設も自力施行で低コスト化を図り乗り切ることができた。

・飼料畑の確保については，近隣の方々に声かけを継続。地道に信頼を得ながら7haまで拡大していく過程が大変であった。

粗飼料生産の取り組み

コスト低減へ向けて

高い購入粗飼料に頼らず
１００％自給粗飼料確保でコスト低減

ローズグラスとトウモロコシの輪作体系の確立

Aほ場
ローズグラス春作付
1年目

Bほ場
ローズグラス春作付
2年目

Cほ場
ローズグラス春作付
3年目(翌年秋更新)

Dほ場
ローズグラス春作付
4年目
トウモロコシ秋冬作

施設の自力施工

コスト低減へ向けて

無駄・無理な投資をしない

平成6年に建てた主に自力施工の低コスト牛舎

手作りのカーフハッチ

母屋の木材再利用の育成舎 →

大型台風にも耐えた牛舎

機械の耐用年数延長

コスト低減へ向けて

- 機械は、入れ物(倉庫)を準備してから導入
  (倉庫も自力施工)
- 機械使用後は、整備し、オイルやペンキを塗るなどのサビ対策
- 無駄な機械は導入しない

機械の倉庫格納

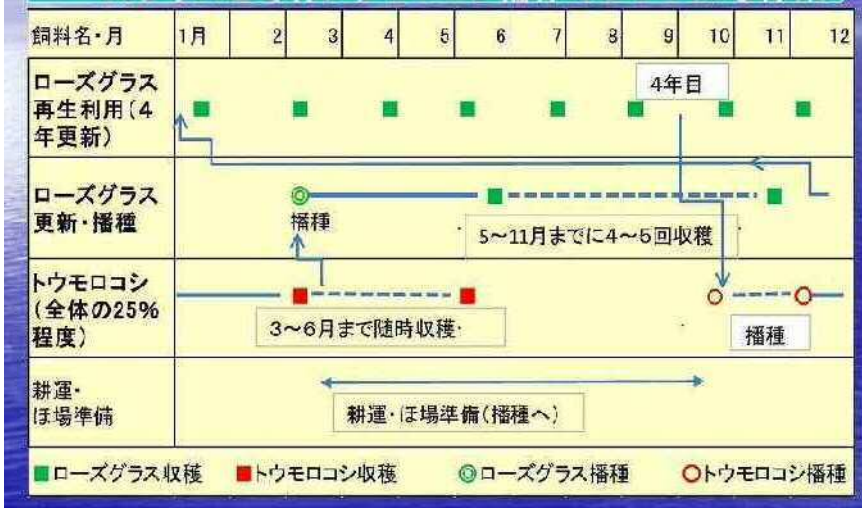
機械使用後の分解掃除

使用後毎回ペンキ塗り

粗飼料生産の取り組み

飼料生産体系

ローズグラスと冬作トウモロコシ輪作のシンプルな体系



繁 － 13

【キーワード】
事業活用，空き施設有効利用,投資抑制
子牛商品性向上，粗飼料自給率100%

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
夫婦　2名

3　飼養頭数
繁殖雌牛80頭

4　飼料作物
夏　作:ソルゴー　12ha
冬　作:イタリアン　7ha，WCS　2ha
稲ワラ:5ha

5　経営の特徴
・繁殖牛のステージ別管理による1年1産の実現。
・高床式ゲージを用いた人工哺育を導入。
・自給粗飼料に加え，堆肥との交換による稲わら収集で粗飼料自給率100%の低コスト経営。
・家族経営協定による役割分担の明確化。
・養蚕から肉用牛施設への改修で投資を抑制するとともに，投資時には園芸作物との複合で経営安定に努める。
・繁殖成績等をパソコンで管理し，効率化を図る。

6　今後の目標
・繁殖雌牛80頭規模の維持。

【経営発展の経過】

S51年3月	蚕業指導所卒業。
S51年4月	養蚕後継者として就農。生産牛3頭飼養。
S58年2月	青年農業士取得。
H3年	生産牛10頭規模。(自家保留)
H5年	生産牛20頭規模。(制度資金を活用)
H7年	養蚕廃業。生産牛40頭へ規模拡大。(自己資金)
H10年	哺育用ゲージ15頭分導入(事業活用)
H12年	生産牛50頭へ規模拡大。(導入事業を活用)
H13年	里いも栽培開始(1→2ha)。育成舎整備(町補助事業を活用)。
H13～14年	子牛発育調査指導実施。
H15～16年	子牛商品性向上対策へ参加。
H17年	里いも栽培中止。生産牛55頭へ規模拡大。
H17年	補助事業を活用し，飼料調製用機械を整備。
H17年	リース事業を活用し，堆肥舎とショベルローダーを整備。
H18年	女性農業経営士取得。パソコン簿記開始。
H25年	生産牛80頭へ規模拡大。(導入事業を活用)

【経営発展の過程で苦労した点】

・子牛の疾病等を考慮して，人工哺育等に取り組んだが，技術習得に苦労した。
・関係機関による子牛発育調査指導に取り組むことで，飼養管理技術の向上が図られた。
・自家保留を中心に，家畜導入事業(農協有)等を活用し，長期間で計画的に規模拡大を図った。
・自給粗飼料の生産において，天候等には左右されるとともに，圃場が散在しており作業効率が悪い。
・養蚕施設を牛舎に改築し，投資を抑えた。
・中古の飼料調製機械を導入し，投資を抑えた。

繁殖牛舎（養蚕施設を改造）

分娩牛舎

子牛育成牛舎

哺育ゲージ（養蚕施設を改造）

防寒対策

自給飼料生産